ひとつの地理学
――石田龍次郎の場合――

竹内啓一

一

本稿は、一人の研究者を伝記的に検討することによって、その人が携った学問そのものの性格を、さらには、その学問が現在かかえている課題を明らかにしようとする試みである。ここでとりあげるのは、地理学者石田龍次郎（一九〇四年―一九七九年）であり、したがって、問題になる学問とは地理学のことである。[1] 検討の素材としては、石田が発表した研究論文、著書が主となることは勿論であるが、彼は、『一橋論叢』の「石田龍次郎名誉教授記念号」（第五八巻 第一号　一九六七年）に十頁にわたる自撰年譜抄なるものを書いている。一九六七年、一橋大学を停年で退職するまでのものであり、書かれた時点における評価、自己正当化をともなうものであることは当然考慮に入れなければならないが、このような形でのいわば「自伝」を残した地理学者は、むしろ稀有なことであり、貴重な資料である。あと、夫人、友人、旧同僚など多くの方から本稿を書くために話をうかがったが、インフォーマントの名前は、ここではいちいち示さない。書かれていることの全責任は筆者にある。

地理学の分野で、このような伝記的方法による「方法論」的反省がなされるようになったのは、比較的最近のことである。メイニエの著書[2]とならんで、近代地理学説史研究において、なによりも、現代地理学における方法

論上の問題意識から出発しているという点で画期的なものであると考えられるクラヴァルの『人文地理学発達史研究』においても、伝記はもっぱら地理学史研究における一史料として、しかも多くの場合、不十分にしか存在せず、かつあまり信頼できない史料と見做されていた。[3] 地理学思想史の研究において、伝記的方法が、学問の、あるいは思想の論理の展開、継承と伝播をおうアプローチと、学問の社会学、すなわち社会的背景との関連にもっぱら注目して、制度・体制としての一学問の展開をおうアプローチとを止揚する一つの途であることに注目して、その方法を多く用いたのは、一九七一年のバッティマーの研究[4]が最初であったと考えられる。

一九六八年、インドで開催された国際地理学連合（IGU）の大会を機に、IGU地理思想史コミッションが発足したが、従来のように、「地理学」の歴史を研究するのではなく、さまざまなランガージュで表現されたトポスに関わる思想の歴史を、思想史として研究しようという点にこのコミッションの新しさがあった。そして、このような研究動向が、計量革命を経験した後の地理学に関する方法論的危機意識に大きくよっていたことも、その後のこのコミッションの活動を見れば明らかである。「革命」後の地理学にみられる「空間科学」「行動主義」「ラディカル――構造主義」など一連の混乱したパラダイム[5]をどう理解し、さらには、地理思想史研究のパラダイムはどのようにして形成されるのかという問題意識がそこには共通してあったのである。

一九七二年から本格的な作業が開始されたこのコミッションの仕事の一つは、時代を近・現代に限って「地理学者」の個別の伝記を集めることで、これは、一九七七年に *Geographers, Biobibliographical Studies* (Mansell) 第一巻が刊行され、現在第六巻までが出版され、作業は世界的規模で継続されている。この作業を通じて、いくつかの新しい問題が提起されることになった。その一つは「地理学者（geographer）」をどのような基準で採録するかということである。その基準は、現代の地理学の観点以外にはありえず、当時の社会で本人が、「地理学者」と見做されていたかどうかとは関係がない、換言すれば、現代の地理学がもつ地平によって「地理学者」の基準が決定される。テローの農場主でもあった経済学者チューネン（Thünen, J. H. von 1783—1850）や、知識

社会学者アルフレット・ヴェーバー（Weber, A. 1868—1958）を、「革命」を経た地理学が、地理学者としてもとりあげざるをえなくなっていることが、この例としてあげられよう。[6] 第二に重要なことは、世界的規模でこの作業をすすめていくなかで、当初このコミッション自体が持っていたエスノセントリズムあるいはヨーロッパ中心主義が反省されざるをえなくなったということである。非ヨーロッパ世界の地理学者の伝記を書こうとすれば、その地理学者が持っている土着的乃至伝統的文化、価値観と、西洋の地理学との二重性、彼の内面における二つの断絶とアーティキュレーション（連節）が問題にならざるをえない。一九八〇年、京都でこのコミッションが「地理学のランガージュ——その東西比較——」というテーマでシンポジウムを催したのを機会に、ここに結集したグループが、世界の多様な文化の中における「地理の思想史」の探求にむかっていることは、このようなコンテクストの中で理解されなければならない。[7]

伝記的アプローチを推進するために、その素材として、「地理学者」の「自伝」の蒐集ということが、当初からコミッション内部で提案されていたが、これは、さまざまな問題をはらんでいるため、コミッションの作業としては実現されていないが、合衆国のバッティマーとスウェーデンのヘーゲルストラントによって、ヴィデオ・ポートレイトの体系的採録という形で、貴重な記録が残されるようになってきている。[8]

(1)　筆者は石田について、その死の直後、学会誌に追悼文を書いたし（「石田龍次郎先生の逝去を悼む」『地理学評論』第五二巻　一九七九年　二七九—二八二頁）、また一橋大学学園史編集委員会編『一橋大学学問史』（一九八二年）中の「社会地理学」の項目においても、石田の学問について言及した。本稿の意図は、さきに書いた二つのものとは異なるものであるが、記述の内容は、一部分、以前に書いたものと重複することをあらかじめお断りしておく。なお『一橋大学学問史』では、青木外志夫教授が執筆した「経済地理学」の項目においても石田の学問の特色がのべられている。

(2)　Meynier, A. *Histoire de la pensée géographique en France*. P. U. F., 1969. この本のかなり詳しい書評を筆者はかつてしたことがある。（『経済地理学年報』第一六巻第二号　一九七〇年　五三—五五頁）

(3)　Claval, P., *Essai sur l'évolution de la géographie humaine*. Belles Lettres, 1964.（竹内啓一訳『現代地理学の論理——その学説史的展望』大明堂　一九七五年）訳

書一八―一九頁参照。

(4) Buttimer, A., *Society and Milieu in the French Geographic Tradition*. The Monograph Series of the A. A. G. 6, 1971.

(5) Johnston, R. J. は Paradigms, Revolutions, Schools of Thought, and Anarchy: Reflections on the Recent History of Anglo-American Human Geography. Blouet, B. W. (ed.) *The Origins of Academic Geography in the United States*. Archon Books, 1981, pp. 303—317 において、一八七〇年から一九五〇年までの期間のアングロサクソン系諸国の主要なパラダイムが、exploration, environmental determinism, regionalism であったが、それにかわって継起してきているのが、spatial science, behaviorism, radical/structural であると整理しているが、これは欧米流の地理学にほぼ共通して言えることである。

(6) 日本人地理学者としては、第六巻までに、山崎直方、小川琢治という二人の代表的講壇地理学者がとりあげられ、いずれも辻田右左男氏によって執筆されたが、現在、源昌久氏による志賀重昂に関する原稿がすでに編集部にとどけられており、日本側としては、今後、福沢諭吉、内村鑑三、牧口常三郎などをもとりあげて、その地理思想、イデオローグとして果たした役割などに光をあてることを予定している。

(7) 日本そして東洋における地理の思想の伝統をほりおこし、そのランガージュのいわば「文法」を発見しようとした日本人研究者の研究成果として、京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房　一九八二年をあげることができる。

(8) これについては、Buttimer, A. & Hägerstrand, T., *Invitation to Dialogue, A Progress Report*. DIA Paper, No. 1, Lund, 1980 にその意図などが説明されているし、京都シンポジウムにおいて、そのコレクションの一部が上映された。

二

石田龍次郎はその晩年、すなわち一九六五年から、病のために執筆不可能になるまでの数年間に、日本の地理学史、とくに、明治以降のそれに関して、多くの研究を精力的に発表した。これを発表年代順に示すと次のようになる。

① 「日本の地理学――その発達と性格についての小論」『地理』第一〇巻 第一号　一九六五年

② 「日本における地誌の伝統とその思想的背景」『地理学評論』第三九巻 第六号　一九六六年

③ 「皇国地誌の編纂――その経緯と思想――」『社会学研究』(一橋大学研究年報) 8　一九六六年

④「日本人の海外調査の展望——戦前・戦中における地理学者の業績」『地理』第一四巻 第一号 一九六九年
⑤「東京地学協会編年史稿」『地学雑誌』第七八巻 第三号 一九六九年
⑥「東京地学協会報告（明治一二—三〇年）——明治前半の日本地理学史資料として——」『社会学研究』（一橋大学研究年報）10 一九六九年
⑦「山崎直方と小川琢治——東西両大学の地理学講座創設まで——」『地理』第一五巻第一二号 一九七〇年
⑧「東京地学協会編年史稿・補遺」『地学雑誌』第八〇巻 第一号 一九七一年
⑨「地学雑誌——創刊（明治一二年）より関東大震災まで——」『社会学研究』（一橋大学研究年報）11 一九七一年
⑩「明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向——山崎直方・小川琢治の昭和期への役割——」『地理学評論』第四四巻 第八号 一九七一年
⑪「戦前回顧」日本地理学会編『日本地理学会五十年史』古今書院 一九七五年[9]

地理学史を、どのようなものとして理解するか、どのような観点から分析するかということは、さきに指摘したように、その人の地理学の地平、すなわち、地理学なるものをどのようなものとして理解するか、あるいは理解しようとしているか、ということに、一方では規定され、他方、学説史的反省がその人の方法論を規定していくという関係を認めるならば、一九六五年以降の同じ時期に発表された次の五つのものは、石田の内面におけるそのような葛藤の産物と考えられるのである。

⑫「『皇国地誌』研究断想——風土的地誌と教育的地誌から研究的地誌へ」『多摩文化』一六・一七合併号 一九六五年
⑬「地理学研究の中身と東南アジアの課題」『地学雑誌』第七五巻 第二号 一九六六年
⑭「地理学的思考へ——日本の地理学研究における課題的反省——」『地理』第一三巻 第一号 一九六八年
⑮「地理学の性格」石田龍次郎編著『地理学研究のための文献と解題』古今書院 一九六九年
⑯「地理学的研究とは何か」『地理』第一五巻 第一号 一九七〇年

皇国地誌編纂については、すでに一九四〇年日本地理学会の総会で報告し、それを『地学雑誌』の論文にまとめているが[10]、当時の石田の関心は、地理学における地誌のあり方であり、「皇国地誌が今日の地誌記載の方法に何を与えたであろうか」という問題意識から、むしろ、地域の客観性を重んじようとしたその先駆的態度を積極

的に評価しようとしたものであった。一九三九年より一九四一年まで、武見芳二、渡辺光とともに『世界地理』全一六巻（河出書房）の責任編集者として仕事を進めるなかで、地誌学なるもののあり方について考える中で皇国地誌に注目するようになったのであろう。ただ、「自撰年譜抄」の一九三三年の項に「このころから明治前半の日本地理・統計・教科書類をあつめはじめ、古書展にはほとんど欠かさず早朝出かけた」とあり、人口、産業の分布の歴史的変化に注目するという石田固有の学風を形成していくなかで、まずはじめには、資料としての皇国地誌に注目したものと思われる。[11] しかし、注目すべきこととして、一九四〇年の報告において、石田は、はっきりと、「学史を研究する意義は、単に過去のある時代にかくかくの事実があったことを証し、或はストラボ、或はラッツェルを単に祖述、記載することではない。それはその内に常に新しい今日及び明日への問題を包蔵し示唆する所にこそ意義が存するのである」とのべている。

一九五二年の『人文地理研究法入門』において、皇国地誌が再びとりあげられ、今度は「未完成の教訓」として、民衆の地理との乖離、および地域独自の課題を究明する地理学者の不在ということが指摘されているが、一九六五年にいたるまでは、学説史に関する業績としては一九五七年の「環境理論系譜抄」、一九六一年の「日本の地理学の系譜」がある程度である。その彼が、一九六五年以後、特に、一橋大学を退職してから、本格的に、近代地理学史、とくに明治・大正期のそれに取り組むようになったのは、どのような理由、動機によるものであったのだろうか。

現在（石田がそれを書いた一九六〇年代後半）の日本の地理学、とくに人文地理学あるいは社会地理学の後進性の理由をみるためには、過去一〇〇年間、近代日本において地理学がいかに発達し、制度的に確立してきたかを明らかにしなければならない（文献⑨および⑯）というのが、書かれている限りでの石田の基本的問題意識である。そして、関東大震災に先立つアカデミー地理学確立前の日本の近代地理学について石田は、次の三つの系譜を考えて、それぞれを総括している。

(一)　明治維新直後から太政官地誌課、後の内務省地理局によって企画された「皇国地誌」の編纂は、中央集権的、中国的史官意識の下に進められ、近代国家による統計、

地図、地籍台帳などの作成の進捗により、その存在意義を失い、ついに明治二〇年代半ばに挫折した。(文献③)

(二) 西欧社会の地理学協会(Geographical Society)を模して、一八七九年に創立された東京地学協会は、日本人による海外知識、地理的情報の収集、普及を目ざして『東京地学協会報告』(*Journal of the Tokio Geographical Society*)を発行したが、新聞、雑誌による海外事情の紹介が多くなるのに従って、当初の目的を失ない、かつ外交官、軍人、旧地理家だけでは新しい方針を樹てることができず、一八八九年より「地学雑誌」(*The Journal of Geography*)を発行していた地学会[12]と一八九一年合併し、「地学雑誌」を発行する協会の性格は、一八九〇年代に大きく変貌した。すなわち、東京地学協会における地学とは、当初、その英文名称からも明らかなように「地理学」Geography のことであった。ところが地学雑誌における地学とは、地質学を中心として、地理学、鉱物学、その他地震学、気象学、海洋学等の地球科学全般をふくんでいた。いずれにせよ「地学」という名前のアカデミズムがここに成立する。

(三) 「地学雑誌」の編集にあたっていた小藤文次郎は、当時欧米において一つの学問として成立していた理科的西欧風の新しい地理学に特別の興味をもっていた。また一八九七年七月から一九〇八年五月までは小川琢治が編集、運営に力をそそぎ、地学より本来の地理学に雑誌の方向を転換させようとした時期であった。同時に、この時期は、日清役後から日露役をはさんで、大陸の地理、資源などに関する深い関心が雑誌にあらわれてくる時期でもある。このようにして、理科的なものではあるが、一時期、『地学雑誌』は、アカデミー地理学揺籃の役割をはたすが、それも一九〇八年小川琢治が地理学教授として京都大学に赴任するまでのことである。そして、東京地学協会は、世界の地理学研究の新しい成果を摂取・紹介する等、読者の要望にこたえながら、日本における近代地理学確立にもっと大きな役割を果たすことができた筈であるのに、それに役立たないまま関東大震災で、蔵書、建物の焼失という壊滅的打撃を受けることになったのである。

このようにして石田は、日本に、一つの研究分野としての地理学が成立するのは、京都帝国大学、東京帝国大学に、地理講座あるいは地理学科が創設され、『地球』

『地理学評論』などの専門誌が創刊されるのをまたなければならなかったと結論するのであるが、「日本における人文地理学のおくれ」の根源を見きわめるための石田の近代地理学史研究は、一九七四年に病のため中断されたままになったのである。彼は、文献⑥および⑨においてとったのと同様の、一種の書誌学的方法を用いて、震災後の『地学雑誌』および新たに創刊された『地球』および『地理学評論』の検討を構想していた。しかし、①から⑯までの文献のなかにおいても、それぞれ断片的にではあるが、人文地理学の発達が、自然地理学の発達に比しておくれた理由に言及している。これを箇条書きすれば、以下のようになろう。

(一)　さきにあげた三つの系譜のうち、第一および第二のものは、近代科学の名に値するものからはるかに遠い状態のまま挫折したこと、そして、第三の系譜に属する先駆的アカデミー地理学者があまりに数少なく劣勢であったこと。牧口常三郎の『人生地理学』も、このような地理学アカデミズムの未成立乃至は未熟による空隙をうめる意図をもつものであり、それなりに価値あるものであったが、その後に確立した地理学アカデミズムは、そのような遺産をまったく継承せず断絶していた。

(二)　日本の地理学では、モンテスキュー、ヘルダー以降の近代思想を通過せず、リッターを消化せずして、直ちにラッツェルにいたり、しかも、ラッツェルを極めて皮相に環境論的に解釈してしまった。

(三)　日本では地球諸科学と歴史学とが、やや早く地理学と近縁関係において発達したのに対して、人間そのものを扱う学問の導入がおくれ、したがって地理学との接触をおくらせた。

(四)　地理が、学校教育における教科として、明治はじめ以来、確乎とした地位を占めてきたことは明らかであるが、その内容を良いものにするための地理教育研究がほとんどなされなかった。

以上の指摘は、たしかに斬新な視点を提示しているのであるが、かなり歯切れが悪い。第二次大戦前および戦後期を通じて、以前の石田は、もっとラディカルなことを歯切れよくのべていた。たとえば、極めてポレミークな調子で書かれた一九三三年の「地理学に於ける法則性——主として環境説と決定説に就いて——」および「再び環境説・決定説について」などがそうであるが、ここ

において、彼はいわゆる理科的思考から地理学――当時の石田は、いわゆる自然地理学は自然諸科学に解消し、地理学とは、社会科学としての人文地理学に他ならないと主張していた――を理解する環境説・決定説を徹底的に批判している。しかし、注目しておかなければならないのは、一九三三年の第一論文が「今日の地理学が恐らく世界的に、又特に日本的に、未だ嘗てなき隆盛を極めてゐるとは、等しく世の称するところである」という書き出しで始まっていることである。人文地理学が自然地理学に比しておくれているという問題意識から出発している晩年の石田と、これは鋭い対照をなしている。さらに、一九六六年に書かれた「自撰年譜抄」の一九三三年のところには次のように書かれている。

「地理学における法則、自然環境の解釈等について藤原咲平、今村学郎両氏の social physics や数量景観派と論争。ただし十分に学界の発展には役立たなかった」

人文地理学の後進性の原因についての指摘の歯切れが悪いのは、その理由の徹底的解明を、震災後を取り扱う後に続く論文で実証的にしようとする意図があったことにもよることは勿論である。しかし、秀才として、師山崎直方に可愛がられ[13]、以後、日本地理学界の日のあたる場所にたえず身を置きながら、同時に、その鋭い批判精神、理論的説得力と組織力とによって、日本における人文地理学の発達を牽引してきた石田が、その晩年において、往時におけるよりも、はるかにペシミスティックになり、だからこそ、日本における近代地理学の発達の足跡を徹底的に検討するという途方もなく大きな構想を持つにいたったことは、この「自選年譜抄」を見ても明らかである。

何が石田をそのようなペシミズムにおとしいれたのか、そして、石田の試みは成功していたのであろうか、すくなくとも、実りある成果を産み出すべきポジティヴな方向をとったものであったろうかということが、この伝記的研究の次の課題となる。

(9)　この文献⑭については、「執筆者石田が未定稿の段階で健康を害ねたため、その後は、未定稿について矢沢（大二――引用者）が最小限度の文章の整理と取捨補綴を行なうにとどめざるを得なかった」とこの本の「序」に記されているので、執筆者としての石田の名前があげられているが、厳密な意味では石田の業績と見做すことができない。

(10)　さきにふれた『一橋論叢』第五八巻第一号に筆者が作

成した「石田龍次郎名誉教授著作略目録」が収録されているので、一九六七年以前の石田の文献については、本稿においてはページ数などの詳しい注記を省略する。

(11) 石田の学風は、歴史の流れの一断面の地理の分析、いわば歴史的景観の復元をもって歴史地理学と考える当時から現在にいたるまで続いている日本における支配的な考え方からすれば、歴史地理学とは見做されなかった。なお、石田が蒐集した明治期の日本地理・統計・教科書類は、筆者を研究代表者とする一九八〇年度科学研究費補助金「地理思想の伝播と継承に関する比較研究」によって一括購入され、一橋大学中央図書館に寄贈されている。

(12) ナウマンの主唱によって一八七八年に創設された博物友会に起源する地学会は英語名を Geological Society of Japan としていた。そして、一八八九年創刊の『地学雑誌』が、当初から *The Journal of Geography* という英文タイトルを持っていたかどうかについては筆者があたったいくつかの図書館のものは、いずれも裏表紙をとって製本しているので、まだ確認できず、筆者が確認できたのは、一八九八年発行のものからである。しかし、小藤文三郎が書いた『地学会誌』一八八五年一―五頁、「地学会沿革小史」および『地学雑誌』創刊号、「地学雑誌発行ニ付地理学ノ意義ニ解釈ヲ下ス」の二つの文章を読むかぎり、当時「地学」とは Geology をも包摂する Geography であると理解されていたと考えられる。

(13) 石田は学生時代、山崎直方の口頭による指示を受けただけで、いくつかの山崎の名前で発表された文章の代筆をしていたとのことである。

三

一九三三年の論争は、石田が直接名指しにしてはいないが、批判の対象にした村田貞蔵、吉村信吉、松井勇など、いわゆる地域計測論の当事者――いずれも東大地理学科出身の石田の後輩である――あるいは、それを推奨したであろう東大地理学教室の主任であった辻村太郎[14]からは、何の反論もなく、むしろ外野席に居た観のある石田と同期の今村学郎、中央気象台の技師であった藤原咲平が石田に反論を加えるという奇妙なものであった。それに対しての再論を、石田は「本誌一・二月号における拙稿『地理学における法則性』は予期してゐた如く、大部分の地理学者よりは大体環境説・決定説について常識的に妥当なところを述べたものであると認められたやうであるが…」という文章で書き出している。わずか四年ほどの間であったが、隆盛を極めた地域計測論が以後急速に衰退したのには、それなりの脆弱性――当時の主潮

であった環境論に制約されていたこと、[15]人文地理学固有の方法論的基盤の検討を欠いていたこと、[16]見出された法則性の現実へのフィードバックが不十分であったこと、[17]適用対象が景観論、より正確には地表形態論の枠組みに限定されていたこと、なによりも、地域計測論的研究が、従来の地理学のように帰納法的論理によるのではなく演繹的論理によらなければならないことを、当事者自身があまり自覚していなかったことなど――を地域計測論が持っていたことはたしかであるが、第二次大戦後の計量革命を先取りする高い水準に達していた[19]新しい研究動向を、石田は、自信をもって、物理的決定説と非難し、社会的現実を無視するものと断じ、結果的にはこの石田の批判が、地域計測論的研究の急速な退潮の契機となったのである。

石田は、このようにして、地理学を、場所的多様性の解明、同一の現象が、自然をも含めた環境条件によって、どのように異なったあらわれ方をするか、それを解明するために、行政地域、統計の単位とは異なる独自の地域設定をする学問であると規定しながら、分布の背後にある普遍性、いわば空間組織形成に内在する法則性の解明にアプローチする途を、自らたち切ってしまい、専ら、歴史的事実の示す所によって分布の変化を研究するようになり、同時に、そのような学風によって、成因論的アプローチを欠如させていたために不毛におわった景観地理学に対して、創造的批判性と優位性を持ち続けたのであった。

一九六四年夏ロンドンで開催された第二〇回国際地理学会議に石田は参加し、経済地理学部会の三人の座長の一人をつとめた。このロンドン会議には、一九五〇年代、六〇年代を通じて、「新しい地理学」あるいは計量革命を推進した主役達は、あまり参加していないし、参加しても、目立ったペーパーを提出していない。[20]唯一の例外は、石田が座長の一人をつとめた経済地理学部会で、とくに七月二二日、応用地理学部会との合同での「経済地理学における統計的技術の利用」と題された会場では、いわゆる「計量派」と保守派とが真正面から衝突して大討論を展開し、フロアに居たアイサード[21]などは、むしろ調停役にまわるような有様であった。この日だけでなく、経済地理学部会全体を通じて、計量地理学に属する報告がかなりあった。

欧米の新着雑誌などを通じて、ある程度、地理学における「革命」の進行のことは知っていたかもしれないが、統計の数字を示すだけでは地理学でないとたえず主張し、相関係数を用いただけでも、そのような研究に対して反撥していた石田にとってみると、この一九六四年のイギリスでの経験は、かなりの衝撃であったようである。この会議について、石田は『地理』『一橋論叢』『人文地理』に三種類の報告を書いているが、はじめの二つにおいて、このことについて、かなり詳しく述べている。ただ、石田は、計量地理学の立場に立つ人たちをすべて「経済学の一部として発達している地域科学 regional science の畑の人」と理解しているが、これは大変な誤解であって、石田が問題にしている報告者の大部分は「地理学の畑」の人であった。石田の所見を引用すると、「地理学と地域科学とが、どこでむすびつくか、問題があるが、日本の地理学もすこしその方面のことは、一応了解しておかねばなるまい。ただ空間的分布だけで数式化することは、地理学の訓練をぜんぜんうけない経済学者としては可能でも、地理学たりうるや否やは研究を要するところである」ことになる。そして「リージョナル・サイエンスを経済学と地理学・経済地理学との中間領域とするためには、地理学の素養を抜きにしてはだめであろう。地理学の畑からこの方に近づこうという人は、とくにそれをはっきりさせねば、経済学の一分科にはなっても、地理学としてはもちろん、中間領域ともなり得ないであろう」と断じている。演繹的論理として地理的乃至環境的条件の捨象がありうることを理解しなかった石田は、彼の言うリージョナル・サイエンスを地理学としては認めなかったが、ここにおいて、一つの学問として、それを認めるにいたっている。さらに、一九六四年十一月に執筆した文献①は、このイギリスにおける衝撃のまださめやらぬ頃に執筆されたものであるが、ここには、次のような文章がある。「日本にも昭和五―一〇年頃 Social physics の風調が地理学界にあったが、戦後合衆国でもリニア・プログラミングを試みて新しい地理学とする学派がある。（中略）……たしかに経済学の側からは、空間的認識を得た一つの進歩であるが、それをもって、新しい地理学はかくあるべしというのは、論者のもっている地理学や経済地理学の概念が、根本において地理学の最少限にもつべきものを抜かしているからであ

る。(中略) 経済学者ないし経済学出身の研究者が、経済地理学に興味をもって新しい研究をせらるるのは昭和一〇年代になってからで、われわれも啓発されおおいに歓迎するところであるが、母屋までのりとって、これが地理学だと主張されるのは主客顚当で、ちと迷惑である。(中略) 欧米では一つの科学として、地理学、経済地理学がりっぱに地位を保って、その広いセンスで一国一地方をみることを評価されているのに、日本で無理に経済学や農業経済学のなかの一小分野に自ら入りこむ必要もなかろう。」

私事にわたるが、本稿の議論と関わる点があるので述べると、筆者は、一九六三年十二月にダンカン等の『統計地理学』[22]を、一九六四年六月に、ブンゲの『理論地理学』[23]の第一版を購入して、よく理解できぬままにそれぞれ入手後早い時期に読了した。このようにして、日本の学界においても、「革命」の進行が知られるようになっており、稲永[24]、河辺[25]、西岡[26]などによる計量地理学の手法によった業績もこの頃までに発表されていたのである。石田がロンドンで「経済学の一部として発達している地域科学の畑の人」と理解したのが、実際には、アイサードを除けば、大部分が、地理学出身で、アングロサクソン系諸国および北欧諸国で、すでに地理学の正統派の地位を獲得しつつあった「計量地理学」あるいは「理論地理学」の分野に属する人たちであることを、石田が知るのには、それほど手間どらなかったと考えられる。石田の「若い友人」[27]の中にも、そのことを石田にのべた人がいた筈である。

このようなコンテクストの中で、一九三三年の論争を、一九六七年に回顧した石田の「ただし十分に学界の発展には役立たなかった」という言葉は、むしろ、世界の学界の中でも、先駆的な価値をもっていたかもしれない育つべき芽を、自分の批判はつぶしてしまったのではないか、という懐疑または反省に由来するものであると理解すべきであろう。

しかし、石田は、現実の場所的条件の相異のいくつかを捨象したところから論理を展開する計量地理学を、本来の地理学として認めようとしなかった。百歩譲って、そのような地理学があるとしても、そのような地理学ではおおいつくせない本来の地理学の分野があるということを、強力に主張しようとした。その時、彼が痛感した[28]

日本の人文地理学のおくれとは、自分をもふくめて、地理学本来の対象と方法とを強力に主張できないこと、「地域科学」や「計量地理学」が地理学でないことを説得的に示す論理を欠いていたことであった。このような新しい研究傾向が、経済学の理論を借りたものにほかならないと批判する時、石田は返刀で、農業経済学、社会学、地代論の成果や理論を借用して、地理学でなくなってしまっている「地理学」をも切らなければならなかった。そして、第二次大戦後、理科的地理学からの脱皮、分布や地域的差異の形成の歴史的な分析、歴史を通じての環境の意味の変化、などという彼の主張にひかれて、彼と親しく接し、彼の指導を受けるようになっていた「地理学界の若い友人」達の地理学は、まさに、そのようなもう一つの借りものの「地理学」だったのである。

彼が、日本の近代地理学の歴史を徹底的に検討して、そのなかで、日本における人文地理学の後進性の理由を明らかにし、現代の地理学にとって有効な理論を構築していこうと思い立ったのは、このような反省、危機意識からだったのである。石田とともに、ロンドン会議の経済地理学部会で座長をつとめ、石田の目には、大変正統的保守的地理学者として映ったソ連のサウシュキンが、一九六〇年代の後半には、演繹論的なメタ地理学を展開していったのと、石田の歩みはあまりに対照的であったし、悲愴味さえおびたものであった。[29]

(14) 当時景観論に着目し、その定量的研究に関心を払っていた辻村が、その教え子にそれをすすめ、成果を自ら編集にあたっていた『地理学評論』への投稿をすすめたであろうというのは、石川義孝の推論であるが、この推論は正しいと思われる。(石川義孝「地域計測論に関する一考察」京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房　一九八二年　二八九―二九七頁を参照)

(15) 前掲石川論文における指摘。

(16) 河辺宏「地理学における〝計量〟について」人文科学科紀要(東京大学教養学部)三八　一九六六年　二五―三六頁。

(17) 奥野隆史「わが国における計量地理学研究――人文地理学分野を主として――」人文地理学研究(筑波大学)Ⅳ　一九八〇年　一五一―一六六頁。

(18) さすがに応援団の藤原は、このことをはっきりと理解していた。(藤原咲平「石田氏の所論について」『地理教育』第一八巻第一号　一九三三年　三四―四三頁。とくに四一頁を参照)しかし、石田の再論および石田が藤原の文章に付した傍線や書き込みから判断すると、石田は、藤原

が、石田論文の急所を見事についていることに気がついていなかったらしい。

(19) たとえば松井勇は「栃波平野の一部に於ける散村分布状態に関する統計的考察」『地理学評論』第七巻 一九三一年 四五九—四七六頁において、地形図をメッシュ方格で被うことによって得られた集落の度数分布のパターンを描出し、栃波平野の散村分布の記述モデルとしてポアソン分布を提示した。この研究はのちに、Matui, I. Statistical Study of the Distribution of Scattered Villages in Two Regions of the Tonami Plain, Toyama Prefecture. *Japanese Journal of Geology and Geography*, 9, 1932, pp. 251—266 として英文で発表されたが、この論文は、一九五〇年以降、諸外国の計量地理学関係の文献において、確率過程に基づいて示された数理モデルからの現実の分布パターンの乖離に注目した点が高く評価されてさかんに引用され、計量地理学のリーディングスにも収録された。なお、石田は、すくなくとも一九六五年末には、この松井論文が外国で高い評価を受けていることを知っていた。

(20) 筆者もこの会議に参加して、石田の報告や座長役にも接したが、会議の全体像については、Hamilton, F. E. A (ed.) *Abstract of Papers, 20th International Geographical Congress*. Nelson, 1964 と Watson, W. (ed.). *Congress Proceedings, 20th International Geographical Congress*. Nelson, 1967 によった。

(21) ペンシルヴァニア大学にあって、地域科学の推進者であったWalter Isard の名前は、会議の参加者名簿にはのっていないが、彼が当日この会場に居て重要な役割を演じたことは事実である。

(22) Duncan, O. D., Cuzzort, R. P. and Duncan, B., *Statistical Geography. Problems in Analyzing Areal Data*. The Free Press of Glencoe, 1961.

(23) Bunge, W., *Theoretical Geography*. Lund Studies in Geography, Ser. C. General and Mathematical Geography, No. 1, Gleerup, 1962. (西村嘉助訳 ベンジ『理論地理学』大明堂 一九七〇年)

(24) 稲永幸男「電話通信発生からみた日本の地域区分」『地理学評論』三二巻 一九五九年 一四五—一六一頁。

(25) 河辺宏「人口移動と距離の関係」『東北地理』第一五巻第二号 一九六三年 四七—五三頁。

(26) 西岡久雄「工業集積に関する覚書——特に集積測定法について——」『青山経済論集』第一四巻四号 一九六三年 五一—七四頁。

(27) 一九六七年の「自撰年譜抄」の一九二九年のところで石田は次のように書いている。「年頭より病床におられた山崎直方先生、七月逝去。師の縁うすく、爾来、むしろ地理学以外の先輩・同僚、また地理学界の若い友人を研究上の手懸りとして今日にいたる。」

(28) 筆者は、一九七一年オックスフォードの本屋に、Har-

vey, D., *Explanation in Geography*. Arnold, 1969（松本正美訳『地理学基礎論――地理学における説明――』古今書院　一九七九年は、この本の前半部の日本語訳である）が山積みされているのを見て、この計量地理学の集体成とも言える書物が、教科書あるいは指定参考書としてひろく用られていることを知り、このことを石田に話した。その時石田は、そのような手法からもれてしまう重要な分野が地理学にはある筈である旨のことを述べていた。まさに、石田がのべたような点を反省して、*Social Justice and the City*. Arnold, 1973（竹内啓一・松平正美訳『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ　一九八〇年）、*The Limits to Capital*, Basil Blackwell, 1982 へと転向していった David Harvey の軌跡を考えると、石田の言葉は示唆にとむ。（「革命」後の地理学における反省については拙稿「ラディカル地理学運動と『ラディカル地理学』」『人文地理』第三二巻　一九八〇年　四二八―四五一頁に詳しい）

(29) たとえば Гохман, В. М., Гуревич Б. Л., Саушкин, Ю. Г. Проблемы метагеографии. *Вопросы Географии* 77, *Математика в экономической географии* 1968 стр 3—14 および Гохман, В. М., Саушкин, Ю. Г. Современные теоретической географии. *Вопросы Географии* 88 *Теоретическая география*, 1971, стр. 5—28 において、サウシュキンは完全に計量地理学の立場をとるにいたっている。なお、石田はサウシュキンを英語読みして、ソースキンと表記している。

四

みずからアカデミシァンであった石田の関心は、いかにして日本においてアカデミー地理学が確立したか、また、それがどのような弱点をもっていたかということであった。すなわち、一九〇七年に京都帝国大学文科大学が、一九一一年に東京帝国大学理科大学が地理学講座をもつにいたり、そこに育ったアカデミシァンの研究発表の場としての『地球』『地理学評論』が、それぞれ一九二四年、一九二五年に発刊された時期が、石田によれば近代地理学が日本に確立した時期になり、彼による詳細な書誌学的研究（文献③、⑥および⑨）は、いわば、その前史を取り扱っただけで未完のまま残されたことになる。しかし、文献③⑥⑨の前に書かれた文献①と後に書かれた⑩とを比較すると、いくつかの点で、石田が見解を変え、認識をあらためていることがわかる。

特に重要な点は、文献①においては、一八九三年、東京帝国大学文科大学に史学・地理学講座が設置されたことには言及しても、一九一〇年にこれが消滅したかの如

く書き、またこの講座の担当者が歴史学者だけで、地理を歴史の補助学科と見做していたという理由から、日本の近代地理学の成立には意味をもたなかったと考えて、殆んど無視している。これに対して、文献⑩においては、史学地理学講座は史学関係講座として存続したことを確認しているし、その発足には、一八八七年から一九〇二年まで教授として在日したリース（Ludwig Riess）が「日本の史学的地理学の必要を説いたことによる」ものであると指摘し、一八九八年に入学して、「リースから自然地理を、政治地理を坪井九馬三から講義された」[30]石橋五郎に注目して、彼自身は、そこから学んだものは殆んど無かったようなことを書いているが、「リースの流れを汲む文科大学系の歴史、歴史地理、またその系統の京都大学の地理に近代的人文研究の可能性」があったことを認めている。ただこの文献⑩でも、石田はこの（東京）帝国大学文科大学の「史学地理学は最初から坪井九馬三の担当であって、名前だけ旧のままで、内容は史学概論で地理学とは無関係であった」と断定して、この系譜の日本の近代地理学の成立にとっての意義の検討をするつもりは全然なかった。しかし、後に中川[31]および吉田[32]によって考証されたように、明治二一年以来、この史学地理学講座ではリースのみでなく坪井、栗田などによって、「史学概論」などではない自然地理学や、ラッツェル流の政治地理学の講義がなされていたのである。そして、中川が指摘したように[33]一八九九年に発足し『歴史地理』を発行し続けた日本歴史地理研究会は、たしかに、その創刊号においては、歴史地理に補助学科としての役割しか与えないことを言明していたが、明治三〇年代の末頃から、歴史地理が、歴史学の単なる補助手段としてとどまるべきか否かについて、内部でも論議があり、一九〇六年には、その名称を日本歴史地理学会と変更するにいたっている。石橋五郎も、一九〇一年から一九〇五年にかけて『歴史地理』に多く書いているし、発足時会員ではないが賛成員には、山上万二郎、吉田東伍、小藤文次郎など、石田が検討した地学雑誌の系譜とも関連する名前が連ねられていたのである。もし、石田が『地球』の体系的検討まで手がけるようになっていたら、あるいは、そこで『歴史地理』からの影響、系譜上の継承関係が問題になっていたかもしれないが、日本の人文地理学の弱さ、おくれの大きな理由として「理科的思考」を言

うためには、考慮すべき他の地理学の系譜が、明治期にはあったのである。

『歴史地理』の系譜とならんで、これも中川が、おなじ論文で指摘していることであるが、文献⑩における石田の内村鑑三、牧口常三郎、志賀重昂に対する評価は、石田独自のものではあるが、石田にはアカデミー地理学が何故、これらの遺産を継承しなかったのか、その断絶が、日本の近代地理学にとって大きな損失になったのではないか、という問題意識は全然ない。石田の検討は、東京地学協会から日本地理学会にいたる、自己の出自に関わる系譜の枠から出ることができなかったと批判されても致し方ないし、あるいは、そのことが石田の目的だったのだということもできよう。同時に、石田の意図が何処にあったにせよ、一九七〇年代以降活潑化した日本の地理学史、地理思想史に対する研究が、石田の一連の仕事から大きな刺戟をうけたものであることは認めなければならない。

石田が、その学問的生涯を通じて、論文、短報、書評などを最も多く発表したのは、日本地理学会の機関誌である『地理学評論』であったが第二次大戦前には、『地理教育』など、基本的には文検地理受験者を読者とする雑誌[34]にも、いくつかの論文を書き、他の執筆者とかなり違った社会科学的な視点、既往の地理学に対する批判精神によって注目されていた。また関連する学会の例会、大会などにも、一九七四年足が不自由になるまで、殆んど欠かさずに出席し、質疑、討論などに熱心に参加していた。第二次大戦後から一九五〇年代にかけての石田は、『新しい日本と世界――地理・社会・経済』(毎日新聞社)、『新しい東京』(毎日新聞社)、『世界地理大系』(河出書房)、『世界の地理』(毎日新聞社)、『世界写真地理全集』(河出書房)、『現代地理講座』(河出書房)、『世界地理』(古今書院)など、数十巻におよぶシリーズの編集を手がけ、さらに『人文地理研究法入門』(一九五二年)、『地理学円卓会談』(一九五四年)、『地理学の社会化』(一九五八年)と、学界で大きな問題になった著書を出版して、日本の人文地理学界に大きな影響力をもつ指導的人物の一人となった。そこにおける石田の立場は、他の社会・人文諸科学と共通する言語をもった地理学の主張、歴史的背景、環境の役割の科学的理解の主張など、革新者、批判者としてのそれであり、それによって、学

閾を越えた「若い友人」達から指導者として迎がれるようになっていた。

「それがどうして地理学なのか」という、なかば詰問を、「若い友人」達に対して、石田は当時から繰り返していたが、環境の役割への配慮、地域的差異の究明というパラダイムが一九六〇年中頃まで、日本の学界には存在していたので、石田の発言は説得力を持ち続けた。

一九六五年以降、石田が、日本における人文地理学の後進性を言い、近代地理学史の検討にむかった事情は、すでに分析した。そしてその学説史の検討が、未完におわったとはいえ、日本における地理学の後進性の根源を解明するという観点からすれば、その方法に問題があることもすでに示した。最後に指摘しておかなければならないのは、日本近代地理学史の検討を狭隘かつ一方的なものにした石田の方法は、文献⑬から⑯において示された石田の地理学における立場、彼の地理学観と密接に結びついていたということである。

計量的モデルをも、経済学的分析方法とともに、借りものと断じて地理学の純化をはかろうとした時、石田の場合、行きつく先は「場所の持っている条件」に注目すること、さまざまな地域のスケールにおいてではあるが、自然をもふくめた環境に注目すること、換言すればシェーファーがすでに一九五三年に徹底的に批判した「例外主義」[35]への純化であった。かつては、社会科学における普遍的法則性から、地理学も出発しなければならないと明言して、「若い友人」達を鼓舞していた石田が、一九六五年以降、地理学に固有の対象はないことを認めながら――あるいは、空間組織という固有の対象を認めないが故に――コロロジーの立場を死守しようとした。計量の論理の網の目にかからないものを明示することによって、その努力が、反動から一転して、新しいパラダイムに対する異常性の提示になることに、はっきりと気がついていながら、病魔におかされた肉体の衰弱と、真に在野的かつ民衆的地理思想の伝統を汲みあげるのには、地理学アカデミズムの枠から出ることのできなかった学説史研究における彼の方法論の限界とが、その具体化を妨げたのであった。しかし、生涯を通じて、これほどまでに戦闘的な姿勢を保ち続けた地理学者は、かつていなかったし、これからもあらわれないのであろう。

(30)　この文章は石田の文章であるが、これは石橋五郎「我

国地理学界の回顧」『地理論叢』第八輯　一九三二年　一—二三頁によるものである。なお、吉田敏弘の検討によると、ここで石橋が自然地理とか政治地理とか述べているのは、講義の内容で、議義の題名は、リースのものも坪井のものも「歴史地理」であった。(吉田敏弘「史学地理学講座における近代人文地理学導入の系譜」京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房　一九八二年　一九二—二〇五頁)

(31) 中川浩一「明治の地理学史—二〇・三〇年代を中心にして——」『人文地理』第二七巻　一九七五年　五〇一—五一五頁。

(32) 吉田敏弘　前掲一九八二年論文。

(33) 中川浩一　前掲一九七五年論文。

(34) 数千人あるいはそれ以上の文部省中等教員検定試験の受験志望者は、地理学関係の出版にとって重要な市場であった。第二次世界大戦時まで、大部な著書を多数出版したのは、文検地理試験委員に限られている。この問題については、中川浩一の学会報告がある。(中川浩一「地理学の興隆と文献制度」『日本地理学会予稿集』12　一九七七年度春季学術大会)

(35) Schaefer, F. K., Exceptionalism in Geography. A Methodological Examination. *Annals of the Association of American Geographers*, Vol. 43, 1953, pp. 226—249. (野間三郎訳「地理学における例外主義」野間三郎訳編『空間の理論、地理科学のフロンティア』古今書院　一九七六年　一四—四九頁)

〔後記〕本稿は昭和五七年度文部省科学研究費補助金、総合研究A「地理思想におけるパラダイムの移行過程の構造」(課題番号　五七三八〇〇二〇　研究代表者　竹内啓一)による研究成果の一部である。このような地理思想史研究に対して、研究代表者は変っても通算六年間も科学研究費補助金が認められ、全国の各大学をおおう三〇名近い研究者が共同研究をすることができるようになったのも、考えてみれば、石田龍次郎が播いた種のひとつが育ったものであると言えよう。本稿の骨子は、この研究グループの一九八二年十二月の合宿研究会において筆者がおこなった報告を骨子にしているが、そこで出された批判をもとに再検討・を加えたので、本稿の構成等は、当日の報告とかなり異なっている。(一九八三年一月十一日　四周忌の日に)

(一橋大学教授)